

# ヒスパニック不法移民と現代映画

田 中 紀 子

## 要 旨

21世紀のアメリカにおいて、正規の市民だけでなく不法移民の数も急増しているのは、メキシコや中南米諸国を出身国とするヒスパニックと呼ばれる人々である。彼らは生活と教育レベルの低さと犯罪率の高さの点からモデル・マイノリティではなく、むしろ歓迎されない存在とみなされる傾向が強い。本稿ではそのヒスパニックの現状と、国境に面する州と政府の対応を探る。

また、2000年以降の映画の中から、ヒスパニック不法移民を扱った3作品を取り上げる。そこには従来のステレオタイプを踏襲した人物設定もあれば、アメリカにおいて過酷な生活を送るヒスパニックの現状、本国で培われた価値観なども見ることができる。ジャンルは異なってはいても、観る側はいずれの作品からもヒスパニックが現在抱えている問題を考えさせられずにはいられない。

キーワード：ヒスパニック、不法移民、『正義のゆくえ』、『スパングリッシュ』、『マチューテ』

## はじめに

2013年8月12日、ニューヨーク連邦地方裁判所は、ニューヨーク市警の職務質問（身体検査を伴う）が合衆国憲法に違反しているとの判決を出した。「不合理な捜査および押収」を禁止する憲法修正第4条、および「法の適正な手続き無しに個人の生命、自由あるいは財産を奪ってはならない」とする修正第14条に抵触するというのであった。<sup>1)</sup> ニューヨーク自由人権協会の調べによると、2012年の職務質問件数は532,011件、そのうち黒人を対象としたものが55%、メキシコ以南地域の出身者すなわちヒスパニックが32%、白人が10%であった。<sup>2)</sup> 一方、2010年の国勢調査では、ニューヨーク市の人口比率

は黒人22.8%、ヒスパニック28.6%、白人33.3%となっている<sup>3)</sup>。そのため、当市の職務質問は特定の人種やエスニック集団に犯罪傾向が高いという前提で行われている、すなわち「レイシャル・プロファイリング」であると判断されたのだ。この傾向はほぼ十年間続いているのだが、ニューヨーク市長は「治安が改善し、多くの人命が救われている」と反論し、控訴を表明した。その後、行き過ぎた職務質問の件数は激減しているが、アメリカにおけるマイノリティに関する問題を改めて考えさせられる出来事であった<sup>4)</sup>。

アメリカのマイノリティのうち、近年人口が急増しているのがヒスパニックであり、中でもメキシコ系の増加が著しい。その中には市民権あるいは永住権を有する者、在住や労働の許可を得ている者の他に、不法入国者や不法滞在を続ける者もいて、この「不法移民」がアメリカの抱える大きな問題の一つとなっている。本稿では、ヒスパニックの現状を押さえた上で、2000年以降に日本でも公開された『正義のゆくえ/I. C. E. 特別捜査官』、『スパングリッシュ』、『マチューテ』の3本の映画を取り上げ、国境を越えてアメリカへ不法入国したメキシコ人の描かれ方について論じる。

## I ヒスパニックの現状

ノンフィクション作家のゲイブリエル・トンブソンは、アメリカ国民による移民全般のとらえ方について次のような文章を書いている。

移民に対して概して2つの見方がある。一つは、大半の白人アメリカ人、特に民兵の経験者に共通する見方であるが、移民は法を犯す者、道徳的に墮落した者であり、アメリカ人の生活様式を絶えず脅かす人々というものである。[中略] もう一つは、移民を搾取される無垢な犠牲者、苦難の中にある名も無き人々という同情的な見方である。生活を向上させようとしてアメリカへやって来た高潔で勤勉な人々で、本質的には謙虚、誠実で、アメリカへの感謝の念を持っているのに、不公平な社会のあり様によって利用されているというものである<sup>5)</sup>。

そもそもアメリカは移民によって形成された国であるが、この両極端の捉え方は特にあとからアメリカへ移住した人々に対してなされる傾向が強い。

21世紀のアメリカを語る際に必ずと言ってよいほど取り上げられるのが、その人口に占めるヒスパニックの割合である。十年ごとに実施される国勢調査によると、2000年にはヒスパニックは約3,531万人、全体の12.5%を占め、従来最大のマイノリティであった黒人(12.3%)を上回った<sup>6)</sup>。その後ヒスパニックは1,517万人以上増加して2010年には約5,048万人を記録し、全人口の16.3%にまで上昇した<sup>7)</sup>。この傾向が続くと2043年には白人(非ヒスパニック)は少数派になり、2050年にはヒスパニックが全体の30%になるとしている記事も見受けられる<sup>8)</sup>。ちなみに、ヒスパニックの出身国として最も人数の多いの

はメキシコ(63%)で、プエルトリコ(9.2%)、キューバ(3.5%)、エルサルバドル(3.3%)と続いている。

ヒスパニックの中には成功者としてアメリカ国民の尊敬を集めている者は数多くいる。2009年にオバマ大統領からヒスパニック初の最高裁判事に任命されたソニア・ソトマイヨールや、ニューメキシコ州でヒスパニックの知事ビル・リチャードソンに引き続き、2011年からアメリカ最初の女性ヒスパニック知事の職を務めているスサナ・マルティネスが例として挙げられよう。またアメリカでは9月15日から10月15日までの期間は「全国ヒスパニック伝統月間」(National Hispanic Heritage Month)と法律で制定されている。多人種多民族国家アメリカにおけるマイノリティの人々の長年に渡る社会への貢献とその文化を祝賀するためであり、その他に2月の「黒人歴史月間」、3月の「アイルランド系アメリカ人伝統月間」、5月の「アジア/太平洋島民系伝統月間」などがある。それぞれの「月間」開始に先立ち、大統領が開始宣言を行うことが恒例となっている。2013年9月13日、オバマ大統領は宣言文の中で、メキシコ系アメリカ人で公民権運動家として知られるセザール・チャベス(1927-1993)の功績を称え、アメリカ人は祖先の出身地には違いはあっても「共通の価値観—自由と正義への愛、進んで努力する者にはよりよい生活が待ち受けているという信念—により結びついている」と述べ、アメリカ国民のさらなる結束を呼びかけたのであった。<sup>9)</sup>

しかし、このような行政や司法の分野での高い地位への登用や国としての祝賀行事はあっても、多くのヒスパニックの生活と教育のレベルは低い。政府は4人家族1世帯の年間所得2万3550ドルを貧困ラインとしているが、ヒスパニックの23.2%がこのラインを下回っている。ちなみに黒人は27%とさらに高く、白人とアジア系は共に11.6%と低い。<sup>10)</sup>失業率は、2013年11月時点でヒスパニック8.6%、黒人11.9%、白人5.7%、アジア系5.7%である。教育面に目を転じると、ヒスパニックの高校中退者の割合は17.6%と最も高く、次いで黒人が9.6%、白人5.2%、アジア系2.1%となっている。<sup>11)</sup>25歳から29歳のアメリカ人に絞った場合、大卒以上の学歴取得者は、ヒスパニックではわずか15%である。これに比べ、アジア系の場合は60%、白人は40%、黒人は23%である。<sup>12)</sup>収入が低いと学費を捻出できない、そうなるが高学歴は望めず、収入のよい仕事には就けないという悪循環が生じ、犯罪に走る者が増加することになる。ピュウ・ヒスパニック・センターの発表では、連邦裁判所において有罪判決を下された者の27%が白人、23%が黒人であるのに対し、ヒスパニックは40%であった。<sup>13)</sup>こういったヒスパニックの現状が、冒頭に挙げたニューヨーク市の例に見られるような偏見や、トンプソンが挙げた移民のマイナスイメージにつながっていると見えよう。<sup>14)</sup>

## Ⅱ ヒスパニックの不法移民

不法移民とは、密入国者と、合法的ビザあるいは国境通過証により入国し、期限が切れた後も滞在を続ける者を指す。国勢調査の数字の中には、当然のことながらこれらの人々の数は含まれていないが、国土安全保障省の推定では総数約1,151万人の不法移民がアメリカには在住し、その59%が25から44歳、53%が男性とされている。最も多く送りこんできた国はメキシコで約680万人、これは不法移民の59%にあたる。次いでエルサルバドル（6%）、グアテマラ（5%）、ホンジュラス（3%）と続く<sup>15)</sup>。法を犯していることになる彼等に対して“illegal aliens”や“illegals”の他に、“invaders”、リオグランデ川を渡って来ることが多いメキシコ出身者を指してさらに侮蔑的な“wetbacks”（スペイン語では「濡れた」を意味する“mojados”）という呼称が使われることがある。

こういった人々を生み出す原因は、何よりも本国での生活の苦しさである。アメリカとでは大きな賃金格差があり、メキシコを例にとるとその最低賃金はアメリカの約14分の1なのである。さらにこの法定賃金以下で働き、極端な貧困な生活を余儀なくされている人々は国民の半数近くに上る<sup>16)</sup>。より良い生活を夢に見、あるいは本国に残してきた家族への送金のため、アメリカを目指す不法移民は増える一方である。実際に入国してから従事する仕事の多くは、一般のアメリカ市民であれば躊躇するような低賃金であるが、それでも不法移民には本国よりも実入りがよいことになるし、そもそも身元を公にできない彼らにとっては過酷な条件下の仕事でも引き受けざるを得ないのだが、貧困階級のアメリカ人からは自分達の仕事が奪われていると思われることもあるし、国境沿いの州民からは不法移民への財政負担が重くなっているとして不快感を持たれることも多い。

不法移民が犯罪に関わる仕事に巻き込まれるケースも多々ある。2009年の報告によると、犯罪者全体のうち、アメリカの市民権を有していないヒスパニックの割合は29%という高さで、その81%が不法入国あるいは不法滞在の罪で裁かれている。また、市民権を持つヒスパニックの中には、移民法を犯してメキシコ以南から人々を不法に入国させたり、輸送したり、あるいは匿う者も多いのである<sup>15)</sup>。

次に、不法移民に関わる最近の法制度について見てみる。36万人の不法移民を抱えるアリゾナ州議会の上院は、2012年4月に不法移民の取締強化の州法を可決したが、6月には連邦最高裁判所は「移民政策は連邦政府が決定する」とし、不法移民の州内労働の禁止、外国人への身分証明書携行の義務付け、不法滞在の疑いがある移民を令状なしに逮捕できるとした3つの条項を違憲と判断した<sup>17)</sup>。その後8月にオバマ大統領は、2年間の暫定措置としながらも不法移民への国内滞在と労働ビザの申請を許可すると発表した。該当するのはその時点で30歳以下、16歳未満で入国し5年以上連続してアメリカに居住

し、高校在学中か、卒業している、あるいは米軍での勤務経験を持ち、犯罪歴の無い者であった<sup>18)</sup>。さらに、2013年6月27日には連邦議会上院が1,100万人の不法移民に市民権獲得の道を開く移民制度改革法案を通過させた。法を犯さずにアメリカに13年間滞在したとの記録が必要との条件付きであるし、下院で可決されないと法律として機能しないのだが、不法移民には大きな吉報として受けとめられた様子であった<sup>19)</sup>。一方で、法定の最低賃金以下での不法移民の労働力により利益を上げてきた企業も数多くあり、それらが経済の一部を支えているというのがアメリカの実情であり、この動きを歓迎しない者も多い。

### Ⅲ 映画『正義のゆくえ / I. C. E. 特別捜査官』

ヒスパニックの中でもメキシコからの移民を題材としたアメリカ映画は何本も制作されており、そのジャンルも数種類に及んでいるが、本稿では日本でも公開された2000年以降の3本を取り上げる。そのうち、ウェイン・クレイマー監督による『正義のゆくえ / I. C. E. 特別捜査官』(Crossing Over, 2009年)は、英語の原題の意味は「越えて渡る」であり、アメリカにおける移民の状況を扱っている。国境を越えて来た者達への国の対応と彼等の悩み、そして国境を再び越えて本国に戻される者達の悲しみをも映画を通じて知らせようとする制作者側の熱意が少々ゆきすぎたためか、不自然に誇張された部分やすんなりと納得できないセリフが気になる箇所はあるが、アメリカの影の部分について考えさせる作品に仕上がっている。

I. C. E. とは「入国税関取締局」(Immigration and Customs Enforcement)の頭字語で、税関部門と移民・帰化の部門の調査と法の執行を担当していた部署が2003年に統合してできたアメリカ国土安全保障省の下部機関である。地方警察と共同して出入国管理に携わり、犯罪歴のある移民を国外退去させる任務に当たっている<sup>20)</sup>。映画の主人公はハリソン・フォードが演じるI. C. E. 特別捜査官マックス・ブローガンで、彼および彼の同僚が出会う移民達の抱える悩みが次々と提示される。模範的な生活を送ってきて帰化を間近に控えている者もいれば、不法滞在者もいて、その出身国はメキシコ以外にもイギリス、バングラデシュ、イラン、オーストラリア、ナイジェリア、韓国と実に多様であるが、彼らに共通するのはアメリカに夢を抱いてやって来たことである。これは、韓国出身の男性が十代の息子に言う「おまえに未来を与えたくてこの国に連れて来たんだ」というセリフに代表されている。

この映画に登場するメキシコ出身者はミレヤ・サンチェスという24歳の女性で、幼い子どもを連れて入国し、ロサンゼルス縫製工場での不法就労していたところにマックス等I. C. E. の捜査が入る。マックスはもともと不法移民に対して厳格さに徹しきれず、

病弱者の健康状態には思いやりを示していた。彼には離婚した妻との間に27歳の娘がいて、ミレヤとほぼ同じ年齢であることも影響したのか、工場の片隅に身を隠そうとしていたミレヤの思いつめた表情を見て、一旦は見逃してやろうとする。しかし、同僚に見つかってミレヤは捕まり、強制退去処分となる。アメリカに残された彼女の男の子をマックスは探し出し、メキシコのミレヤの家へと連れて行き、祖父母に引き渡すのだが、その前日に、息子の身を案じたミレヤは再びアメリカへと向かっていた。消息がなく彼女の身を案じていたマックスであったが、死後2日が経過した彼女の死体が、サンディエゴのメキシコ国境地帯で見つかるのである。

ここで、アメリカの国境の状況についてまとめてみる。連邦政府、そしてメキシコ国境に接するテキサス、アリゾナ、カリフォルニアなどの州は、1990年代以降特定地域のフェンスの嚴重化、投光ランプや埋め込み型センサーの設置、暗視ゴーグルや軍用赤外線スコープといった機器を駆使した取り締まりを行ってきている。さらに、遠隔監視カメラ、赤外線暗視カメラ、高輝度ライトも設置されるようになった。<sup>21)</sup> オバマ大統領は、就任当時から移民対策には積極的で、不法移民のうち犯罪者を国外退去させ、国境取り締まりをさらに嚴重にすると強調している。2013年3月27日のABCニュースが伝えたところによると、現在では国境警備隊員がほぼ22,000人に増やされ、フェンスの長さは1,041kmを越え、125機の航空機と6機の無人機での監視が行われている。<sup>22)</sup> しかし、国境警備が強化されると、監視の目を避けて自然条件の厳しい砂漠、山岳地帯、運河、川からの入国を試みる人達が増える。そうすると熱射病、低体温症、高熱症、脱水症、溺水、交通事故、中には蛇やサソリの毒により命を落とす者が増加し、また逮捕への抵抗を示したことで国境警備隊員に射殺されるという事態も生じる。2012年にはアメリカ南西部の国境沿いで477人の死体が確認され、その前年(375人)より死者が増加したとの報告がなされている。<sup>23)</sup>

映画『正義のゆくえ』に話を戻す。国境地帯の草がまばらな乾燥した土地を歩き、脱水症で死亡したと思われるミレヤの片足からはスニーカーが脱げ、素足は黒く変色している。彼女の首からは十字架のネックレスがかかっており、財布には息子を腕に抱いた彼女と両親の写真が入っていて、死体を発見した国境警備員は思わず顔を曇らせ、「悪いコヨーテ (wrong coyote) の仕業だ」と言う。「コヨーテ」とは越境を斡旋する不法業者のことで、法外な値段を要求したり、国境警備隊の目の届かない所、すなわちこのミレヤのように市街地まで徒歩では到底行き着けない所で車から降ろすこともあるのだ。

#### IV 映画『スパングリッシュ』

『スパングリッシュ/太陽の国から来たママのこと』(Spanglish) は、2004年に公開

されたジェームズ・L・ブルックス監督による映画である。原題の“Spanglish”はSpanishとEnglishを組み合わせた造語で、スペイン語圏から英語圏へと移動し、両方の文化を背負った母親と娘を示していることになる。6歳の時に母親フローラと共にアメリカへ不法入国し、滞在を続けているクリスティーナが、プリンストン大学への入学を志望し、大学へ送ったエッセイに書かれた内容を再現するという形で進行するロマンチック・コメディである。

『正義のゆくえ』のミレヤは、金儲けに徹する冷淡な女性に幼い子どもを預け、過酷な工場労働に耐え、強制退去後には子どもと死に別れるという悲惨な結末に追いやられるが、同様にメキシコ出身のシングルマザーではあっても『スパングリッシュ』の母と子をめぐる状況はがらりと異なる。フローラとクリスティーナは、幸運に守られた稀有なケースであろう。この2人を小型トラックで国境まで運ぶ「コヨーテ」をも含め、登場人物の中に彼女達を騙そうとか、軽蔑したり無視するような悪意のある人間は存在しない。アメリカに入国してからのフローラは、ロサンゼルス市内のスペイン語のみで暮らすことのできる地域で丸6年間、昼はクリーニング店、夜は別の商店で2つの仕事をこなしたことになっているが、画面に映し出された嬉々として働く彼女の表情からは辛さは全く伝わってこない。当時を回想する娘のクリスティーナの文章も「私達は幸せで安全でした」となっている。その後フローラはかなり高額<sup>24)</sup>の給金での家政婦の仕事に就くことができ、一緒に住み込むことが許された娘は白人の雇い主デボラに気に入られ、私立学校での奨学金手続きの世話さえしてもらえるのである。リアリティの点では疑問を抱かせる映画と言えるかもしれないが、新たな国で暮らしながらメキシコ出身者としての価値観を守り続ける母親と、葛藤を覚えながらも母親への愛情を失わない娘の様子が興味を引く。

クリスティーナのエッセイのテーマは「自分に最も影響を及ぼした人物」で、彼女は自分の母親の生き方について語るのだが、この母親に表されたメキシコ人女性とはどのようなものだろうか。他の移民集団に比べてメキシコ系の特徴は、英語習得にあまり熱心でなく、不法入国者が多い点がよく指摘される。メキシコ系移民が他の多くのアメリカ人に与えている好ましくないイメージについて、ゲイブリエル・トンプソンは「英語を学ぼうとしない。怠惰で、福祉に頼ろうとしてアメリカへやって来ている。あるいはアメリカ国民から仕事を奪おうとしている。麻薬の売人である。乱暴。病気を蔓延させる。子供に性行為を行う。不道德である」と述べている<sup>25)</sup>。アメリカに入国したフローラの場合も英語を覚えようとか、早くアメリカ社会に適応しようという気はさらさら無いが、トンプソンが挙げた他の点は彼女にはあてはまっていない。牛島万によると、ヒスパニックの女性に対する従来のプラスのイメージは「カトリックを信奉する従順で貞潔」、情熱的で、「白人の若い女性にはあまり感じられない母性、つまり母親的な強さと

無償の愛を提供する女性」であり、マイナスのステレオタイプは「強いスペイン語なまりの英語を話し、お喋り好きで、学がなく短気で癪癪持ちの女性」だとなっている。<sup>26)</sup> フローラは白人家庭で働くうちに必要に駆られて英語の勉強を始め、その英語からはきついスペイン語なまりは抜けないが、忍耐強く学ぶ努力を続ける。雇い主である白人夫婦の自分の娘への甘やかしとも見える言動に対しては、臆さず抗議をするが、「短気で癪癪持ち」には当たらない。フローラのセリフにはキリスト教における「罪 (sin)」という語が何度も出てくるし、娘には「キリスト教徒」を意味する「クリスティーナ」という名前が付けられていて、敬虔なカトリック信者であることも強調されている。スペインの女優パズ・ベガがこのフローラを演じていて、ベガは他の映画で見せるセクシーで妖艶な魅力を抑え、薄い化粧と質素な服装を通し、ヒスパニック女性のプラスのイメージとされる誇り高く気丈で貞潔な母親の面を前面に押し出しているのである。

この映画は、ヒスパニックの実情についても簡潔に触れている。おそらくほとんどの移民にあてはまると思われるが、別の国に移住した当初は安心感を求めて本国出身者の多い地域を居住地に選ぶであろう。ましてフローラはシングルマザーであり、母国語を話す人の多い地域に強く惹かれたのは当然である。そのため、ヒスパニックの割合が34%のテキサスを素通りして、48%のロサンゼルスへ向かった、と映画の中で語られている。2010年の国勢調査では、ヒスパニック住民数の多い州は順にカリフォルニア、テキサス、フロリダ、ニューヨークで、最初の2州にはメキシコ系、フロリダにはキューバ系、ニューヨークにはプエルトリコ系が多い。州人口に占める割合の高い順はニューメキシコ (46.3%)、テキサス (37.625%)、カリフォルニア (37.617%) となっている。<sup>7)</sup> 映画の公開年は2004年であったので、テキサス州については、当時からさらに比率が上昇したことになる。不法移民のヒスパニックについては、その人数が多い州の順は上記の国勢調査と同じで、2011年の推定ではカリフォルニア (283万)、テキサス (179万)、フロリダ (74万)、ニューヨーク (63万) である。<sup>15)</sup> なお、ロサンゼルスは相変わらず48.5%と高く、市民の約半数を占めていて、<sup>27)</sup> 不法移民を入れると、その割合はもっと高いはずである。映画のフローラは、娘のためにより良い収入を得ようと、富裕な白人居住地域へ通うことになるが、雇い主のデボラのセリフ「いざとなったら911 (警察や消防などの緊急電話番号) にかけて2番を押したら、スペイン語で受けつけてくれるのよ」—は、この都市のヒスパニックへの対応を反映している。メキシコとの国境から遠くないロサンゼルスは、ニューヨークに次ぐアメリカ第2の大都市であり、中南米の人々の目には仕事にありつける可能性の高い場所と映り、いわゆるアメリカン・ドリームを掻き立てられずにはいられないのであろう。

この映画の一つの意図は、親子の絆について考えさせることである。白人家庭に別れを告げることを決断したフローラに、クリスティーナは怒りと悲しさをぶつけるが、こ



の時フローラが娘に発するのは「あなたは私とは違う人間になりたいの?」という質問である。ほどなく親子は和解し、その後結びつきは弱まるどころかさらに強くなる。それから6年経て大学入学の年齢に達したクリスティーナは、「私のアイデンティティは、母の娘であるということです」とエッセイに書くほどで、これはプリンストン大学の入学審査員の心を打ったようだ。子どもを一個の人格として尊重し、親と異なる生き方であっても、むしろそれを奨励することが良しとされる傾向の強いのがアメリカ人なのだが、それとは大きく異なるメキシコ人の価値観で最後は締めくくられている。これをハッピーエンドとみなすかどうかは、見る側の判断に任されている。「あなたは私とは違う人間になりたいの?」というフローラの言葉を、母親から娘への一種の脅迫、呪縛と解釈することもできよう。

むしろ、飲酒癖があり男性遍歴も重ねてきて、今は60歳を超えていると思われるデボラの母親が、別れ際にフローラに言う「私は私のために生きている。あなたは娘のために生きている。どちらももうまくゆかないわね」という言葉の方が説得力を持つと言えるかもしれない。また、フローラとクリスティーナが不法移民であるという事実を思い返すと、心温まるロマンチック・コメディとして片づけるわけにはゆかないであろう。

## V 映画『マチェーテ』

ロバート・ロドリゲス監督による『マチェーテ』(Machete, 2010年)は、車がガレージに突っ込み、血しぶきが飛び、首が転がり、手足が切り取られるというシーンでスタートするバイオレンス満載のアクション映画である。主人公はダニー・トレホ演じるメキシコ連邦捜査官で、彼の呼び名の「マチェーテ」が映画のタイトルとなっている。中南米の先住民が低木やサトウキビの伐採と武器に使用してきた重く幅広の刃を持つ鉞が「マチェーテ」であるが、正義感の強いこの捜査官はマチェーテを好んで用いる。メキシコの警察ばかりでなく、アメリカの麻薬取締局や連邦保安官をも手なづけ、上院議員とも裏で繋がっている麻薬違法取引組織のボスにより、マチェーテは妻子を惨殺される。その後テキサス州に不法入国して日雇い労働者として3年を過ごしていたのだが、麻薬王や自警団長、上院議員たちを相手に壮絶な闘いを繰り広げることになる。敵対者を演じる俳優にスティーヴン・セガール、ドン・ジョンソン、ロバート・デニーロといった豪華な顔ぶれ、さらにジェシカ・アルバ、ミシェル・ロドリゲス、リンジー・ローハンというセクシーな女優たちが加わり、急速度に展開するエンタテインメント性の高い映画となっている。荒唐無稽な要素を多分に盛り込んだ作品ではあるが、主人公の描き方、またヒスパニック不法移民に悩まされている地域ならではのテキサス人の人物設定や彼等のセリフも非常に興味深い。

『スパングリッシュ』を取り上げた前章で、メキシコ人女性のステレオタイプを挙げたが、男性はどうであろうか。牛島万は「ステレオタイプのイメージとして、貧困、短気、暴力、殺人、ならず者、銃など、負のイメージが多い」と述べている。<sup>28)</sup> ホアキン・アルヴァラドは、1920年代からの映画で繰り返し描かれてきたヒスパニック男性像を「脂ぎった奴ら (Greasers)、痲癩持ち (Spitfires)、無法者 (*Bandidos*)、ギャング、怠惰な愚か者」と説明している。<sup>29)</sup> マチエーテはこの最後の2つ以外のすべての要素を満たしている。銃を操ることはもちろん出来るのだが、接近戦においてインパクトの大きいマチエーテを振り回す場面が多く、より「暴力」的な面が強調されている。口数の少ないマチエーテが話す英語は「マチエーテ、メールしない。でもマチエーテ、証拠掴む (Machete don't text. But Machete get evidence)」とブロークンであり、英語が堪能でなく教育程度が低く見えるメキシコ人のイメージにも合致している。一方、メキシコ系女性のルース (ミシェル・ロドリゲス) は正規のアメリカ市民であるが、貧困なメキシコ人を不法入国させ、食料と職業と住居を世話し、入国後行方不明になった人達の捜索を展開する地下組織のボスという設定である。行動力と精神力に富み、多くの男性の部下を率いていて、若年ながら「母親的な強さと愛情」を持ち合わせている。つまり、『マチエーテ』は広く浸透しているステレオタイプを活用し、大衆が親しめる映画に作り上げられていると言えよう。

この映画の舞台となっているテキサス州は、メキシコとの国境線の半分以上に面していて、カリフォルニア州、アリゾナ州、ニューメキシコ州と同様に不法移民への反感は強く、国境警備に神経を尖らせている。2008年にイギリスのBBCが制作したドキュメンタリー映像には、テキサス州の国境警備隊員の1人が、自分の仕事を「害虫駆除」と形容し、「不法移民1人当たり年間4千ドルも地元の税金が使われて」いて、一般市民が敬遠する低賃金の仕事が不法移民にあてがわれるために「賃金の相場は下がる一方」だと話す様子が映し出されている。<sup>30)</sup> 数名の白人市民が道路沿いに立って掲げている看板には「支援ではなく、追放を!! (DEPORT, NOT SUPPORT!!)」や「捕まえて刑務所へ (NAIL 'EM AND JAIL 'EM)」と書かれている。後者の看板を手をしている女性は、不法移民について「税金は払わないし、色々な病気を持ちこみ、レイプや殺人事件を起こしている。仕事が無いと強盗に走る」と不満を噴出させている。まさに、第4章に引用したトンプソンの文章が生で語られている状況なのである。

『マチエーテ』ではこういった感情をさらに煽る人物として、テキサス州選出のマクラフリン上院議員 (ロバート・デニーロ) が登場する。再選に向けての彼のテレビ広告では、不法移民は「寄生虫」呼ばわりされ、その侵入によりアメリカは「食べ物にされ、崩壊する」との警告となり、国境の電気柵の設置の徹底と不法移民の恩赦反対が叫ばれる。マクラフリンは国境へ車で乗りつけ、夜の闇にまぎれて越境したメキシコ人を見つ

けると、自警団員に銃殺させる。アメリカで生まれた者は自動的にアメリカ市民と認められるのだが、それを許したくないこの議員は、越境者の中にいた妊婦に対しても容赦なく殺害させる。ヒスパニック不法移民への嫌悪感を極度に誇張し、カリカチュア化した人物である彼の選挙演説は以下の通りである。

テキサス州は試練を受けた。そして試練に負けて国境は脅かされている。外国人、侵入者、よそ者が国境を越えて日夜やって来る。奴らは我々の血を吸う寄生虫だ。我々の町や郡や州にはびこり、国を食い尽くす。これは間違いなく戦争だ。不法移民が国境を越える度、この崇高な地が侵略される。これは明らかなテロだ。世の中は「変革」の声ばかり。だが、なぜ変革が必要だ？ 自由で素晴らしい州なのにを変えたくない。正統な市民は勤勉なアメリカ国民だ。額に汗して働き、給料を手にする。私はこれを変えたくない。奴らが望んでいるのは変革、変化、チェンジ。法律の改正。門戸を開きテロリストまで受け入れる。これでどんな変化となるのだ？ テキサスは貧しい州になる。我々のポケットには小銭だけ。薄汚いウジ、ヒル、寄生虫どもが我々の金を奪い去り、小銭だけ残してゆく。もう一つ言おう。さあ皆さん、誰に投票しますか？

『マチューテ』が公開された2010年はオバマ大統領が就任した翌年にあたり、マクラフリンが繰り返す「変革 (Change)」はオバマが連呼した言葉であり、コメディ色をねらったものであろう。不法移民への厳格な対処を要請するのは共和党員に多く、その一例がロン・ポールである。ポールはテキサス州選出の連邦下院議員を長年務め、大統領選挙にも立候補したことがあり、不法移民への生活保護と合法化、および出生地主義に反対を表明し、国境警備のさらなる強化を主張している。テキサス州選出とはいえ、彼はペンシルベニア州出身である。マクラフリンは最後に追い込まれた時には「俺はテキサス出身ではない」と言う。さすがに彼は共和党ではなく無所属とされているが、ポールがマクラフリンという人物設定の際に参考になったと考えてよいだろう。

『マチューテ』での入国税関捜査官は、上昇志向と正義感の強い女性サルタナ・リベラ (ジェシカ・アルバ) がその任務に当たっている。彼女はアメリカの法制度を信じ、不法移民を監視してきたのだが、映画の終盤では、マクラフリン議員が強硬な国境警備の必要性を主張する理由を知って激怒する。実はマクラフリンは麻薬組織と結託していて、麻薬の流入を困難にして価格を吊り上げ、その利益に預かろうとしていたのだ。怒りのおさまらないサルタナは車の屋根に駆け上がり、「正義をもたらさないのは法ではない！ 国境は権力や名声を欲しがる裏切り者らが引いたものだ。あいつらに本当の法の意味を知らせる時だ！ 国境を越えた人達が悪いんじゃない、国境が私達を分断したんだ！」と叫ぶ。バイオレンスとアクションと笑いに加え、このようなサルタナのセリフ以外に、不法入国者の殺害を命じていたマクラフリンがメキシコ人と間違えられて殺されるシー

ンもあり、ヒスパニックの人々からの好感も獲得できる作品となっている。

## おわりに

アメリカを形成するマイノリティのうち特に近年その人口を増加させているのが、メキシコや中南米諸国を出身国とするヒスパニックと呼ばれる人々である。本稿では、正規の市民とみなされるヒスパニックと不法移民をめぐる状況を報告し、生活と教育レベルの低さと犯罪率の高さが他のアメリカ国民にマイナスのイメージを与え続けていること、またオバマ政権が移民制度改革に積極的に取り組んでいるという現状を探った。

ヒスパニックを扱った映画は1920年代から数多く制作されてきているが、本稿では2000年以降の映画の中から過酷な生き方を突きつけるシリアスな作品、ヒスパニックの親子関係をロマンチック・コメディの中に描いた作品、エンタテインメントに徹したアクション作品の3作を取り上げ、その中に見られる不法移民の描かれ方について考えた。映画はフィクションではあっても、現実を映す鏡である。現実問題として、上院を通過した移民制度改革法がその後下院ではどうなるのか、悪質な「コヨーテ」や書類偽造業者、巧妙なネットワークをめぐるせ政府や州の職員を買収する麻薬組織への対策をどうするのか、またテキサスの正当な領有権を持つのはアメリカなのかメキシコなのか、さらに「アメリカ人とは何か」という本質的な問題も残されていて、国境に面する州と連邦政府のヒスパニックへの対応からは目が離せない。

## 注

- 1) ABC News (2013年8月12日)  
<http://abcnews.go.com/Blotter/judge-rules-nycs-stop-frisk-unconstitutional/story?id=19936326>
- 2) "Stop-and-Frisk Data" New York Civil Liberties Union.  
<http://www.nyclu.org/content/stop-and-frisk-data>  
従来、アメリカ合衆国の住民のうち、スペイン語を公用語とするメキシコ以南の地域の出身者を「ヒスパニック」、ポルトガル語やフランス語を公用語とする国々の出身者をも含める場合には「ラティーノ」という語が多く使われたが、最近では*Longman Dictionary of Contemporary English* (5th Edition, 2009) は「ヒスパニック」を「スペイン語またはポルトガル語が話されている国々、特にラテンアメリカの出身者」、*Collins Cobuild Advanced Dictionary of English* (6th Edition, 2012) は「アメリカ合衆国の住民で中南米出身、またはその家族が中南米出身の者」と定義している。また、アメリカの公的機関が発信する文書でも「ヒスパニック」と「ラティーノ」を交換可能な語という扱いをするケースが増えている。本稿では「全国ヒスパニック伝統月間」やピユウ・ヒスパニック・センターに言及する箇所があるため、「ヒスパニック」の語を用いる。
- 3) "Population Growth and Race/Hispanic Composition," *NYC 2010 Results from the 2010 Census* <http://www.nyc.gov/html/dcp/pdf/census/census2010/pgrhc.pdf>

- 4) 本稿では、アメリカ合衆国を「アメリカ」と表記する。
- 5) Gabriel Thompson, *There's No Jose Here: Following the Hidden Lives of Mexican Immigrants* (New York: Nation Books, 2007), p. 4 .
- 6) “Overview of Race and Hispanic Origin 2010” U.S. Census Bureau  
<http://www.census.gov/prod/2001pubs/c2kbr01-1.pdf>
- 7) “The Hispanic Population” U.S. Census Bureau  
<http://www.census.gov/prod/cen2010/briefs/c2010br-04.pdf>
- 8) Hope Yen, “Census: White Majority in U.S. Gone by 2043” *Associated Press* (2013年 6月13日)  
[http://usnews.nbcnews.com/\\_news/2013/06/13/18934111-census-white-majority-in-us-gone-by-2043?lite](http://usnews.nbcnews.com/_news/2013/06/13/18934111-census-white-majority-in-us-gone-by-2043?lite)
- 9) The White House, Office of the Press Secretary (2013年 9月13日)  
<http://www.whitehouse.gov/the-press-office/2013/09/13/presidential-proclamation-national-hispanic-heritage-month-2013>
- 10) “Many Latinos Live Below Poverty Line, Census Data Shows” *Fox News Latino* (2013年 2月22日)
- 11) “Economic News Release,” Bureau of Labor Statistics, U.S. Department of Labor  
<http://www.bls.gov/news.release/empstat.toc.htm>
- 12) “High School Dropout Statistics” *Statistic Brain* (2013年 4月28日)  
<http://www.statisticbrain.com/high-school-dropout-statistics/>
- 13) Lynn O’Shaughnessy, “Record Numbers Earning College Degree” CBS News (2012年11月6日)  
[http://www.cbsnews.com/8301-505145\\_162-57545427/record-numbers-earning-college-degree/](http://www.cbsnews.com/8301-505145_162-57545427/record-numbers-earning-college-degree/)
- 14) Mark Hugo Lopez and Michael Light, “A Rising Share: Hispanics and Federal Crime” Pew Hispanic Center (2009年 2月18日)  
<http://www.pewhispanic.org/2009/02/18/a-rising-share-hispanics-and-federal-crime/>
- 15) Michael Hoefer, Nancy Rytina & Bryan C. Baker, “Estimates of the Unauthorized Immigrant Population Residing in the United States: January 2011,” Office of Immigration Statistics, U.S. Department of Homeland Security, March 2012, pp. 2 – 5 .
- 16) Wage Indicator Team, “Mexico Minimum Wage-January 1, 2013 to December 31, 2013”  
<http://www.wageindicator.org/main/salary/minimum-wage/mexico>
- 17) 中川正紀「アリゾナ州移民法判決」『新時代アメリカ社会を知るための60章』（明石紀雄監修）（2013年）明石書店、pp.85 – 88.
- 18) Steve Hendrix, “Young immigrants can apply for Dream Act-like protections starting Wednesday” *The Washington Post* (2012年 8月14日)  
[http://www.washingtonpost.com/local/young-immigrants-to-apply-for-dream-act-protection-wednesday/2012/08/14/676471de-e63d-11e1-8741-940e3f6dbf48\\_story.html](http://www.washingtonpost.com/local/young-immigrants-to-apply-for-dream-act-protection-wednesday/2012/08/14/676471de-e63d-11e1-8741-940e3f6dbf48_story.html)
- 19) ABC News (2013年 6月27日)  
<http://abcnews.go.com/Politics/senate-passes-immigration-reform/story?id=19506151>
- 20) ICE <http://www.ice.gov/>
- 21) 西山隆行「移民政策と米墨国境問題」『マイノリティが変えるアメリカ政治』（久保文明他編著）（2012年）NTT出版株式会社、pp.13 – 14.
- 22) ABC News (2013年 3月27日)  
<http://abcnews.go.com/Politics/senators-tour-arizona-mexico-border-gain-perspective-immigration/story?id=18826824>

- 23) Alan Gomez, "Big Surge in border-crossing deaths reported" *USA Today* (2013年3月18日)  
<http://www.usatoday.com/story/news/nation/2013/03/18/immigrant-border-deaths/1997379/>
- 24) 佐藤唯行『映画で学ぶエスニック・アメリカ』(2008年) NTT出版株式会社、pp.30-31.
- 25) *There's No Jose Here: Following the Hidden Lives of Mexican Immigrants*, p. 3.
- 26) 牛島万「〈情熱〉と〈母性〉と」『アメリカのヒスパニック＝ラティーノ社会を知るための55章』(大泉光一、牛島万編著) (明石書店、2005年) p.306.
- 27) <http://www.census.gov/prod/cen2010/briefs/c2010br-04.pdf>  
<http://quickfacts.census.gov/qfd/states/06/0644000.html>
- 28) 牛島万「映画は社会を映す」『アメリカのヒスパニック＝ラティーノ社会を知るための55章』  
p.303.
- 29) Joaquin Alvarado, "Changing Faces: Exploring Latino/a History, Culture, and Identity through U.S. Cinema," *Teaching Ethnic Diversity with Film* (edit. Carole Gerster) (Jefferson: McFarland & Company, 2006), p.77.
- 30) "What Is an American?" *The American Future*. Oxford Film and Television/BBC, 2008.